

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	中高ドイツ語への手引
Author(s)	岡崎, 忠弘
Citation	ニダバ , 3 : 57 - 60
Issue Date	1974-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00044709
Right	
Relation	



中高ドイツ語への手引

岡崎忠弘

中高ドイツ語 (Mittelhochdeutsch) の語学面からの研究に駆け出したばかりの私が、「手引き」の題目のもとに Mhd. を紹介することは、大変おこがましいことでもあるし、また私ごときがよくなることでもありません。しかし、言語学やドイツ語学専攻の身近な若い人たちが、ひとりでも、Mhd. の語学的研究に進路をとって共同研究ができればと、つねづね願っていますので、私の拙い勉強方法と方針とを卒直にお話し、手許にある資料を紹介したいと思います。テーマがまだ決定せず、ふらふら迷っている若い方があれば、ひとつ誘惑してやろうというたくらみです。ドイツ本国に長く滞在され、ドイツ語学に造詣の深いある先生のお話では、ドイツ本国でも Mhd. を語学の面からアプローチを試みている人は少なくないそうです。日本においてもドイツ語学専攻生は文学に比すれば極めて少いし、その少い中において Mhd. でもひとつやってみようという人は更に少い。それだけに困難も多いし、またそれだけに未開拓の分野も多いわけです。この沃野を放っておく手はありません。興味ある研究テーマがいたるところにころころに散らばっているに違いありません。

Uns ist in alten maeren wunders vil geseit
von helden lobebaeren, von grôzer arebeit,
von fröuden, hōchgezîten, von weinen und von klagen,
von küener recken strîten muget ir nu wunder haeren sagen.

これは Das Nibelungenlied の第1詩節です。Mhd. から類推しておおよその文意は把握できますが、細かい点ではいろいろと疑問が生じます。arebeit, hōchgezît は Mhd. の Arbeit, Hochzeit と同義だろうか。wunders は属格だろうか、なぜだろうか。geseit の不定詞は何だろうか。 hoeren sagen の不定詞の連続は sagen hoeren の語順がいゝと思われるのに、等々。こういう疑問すべてに答えてはくれませんが、文法書としては、

1. 相良守峯：中高ドイツ文法、南江堂 が最もとっつき易いでしょう。一通り読んだら、Mhd. の原文にあたり、疑問点に出くわしたら、また文法書で調べるというやり方が、楽しく勉強できると思います。文法書を完全に征服し切ってから読本に取りかゝるやり方では、Mhd. がひからびて見えてくるんじゃないかと思われる。原文を読み進んでいくうちに、文法書に詳しく説明してないとか、あるいは自分の解釈と異なる説明がなされているとかの文法現象に行きあたったら、その箇所をカード化し、同じ事例を沢山集め、更に詳しく資料を漁り、そこに何らかの規則性はないかと考察を進めてゆけば、論文への手掛りも得られましょう。基本的な文法書を更に挙げると：

2. Helm/Ebbinghaus : Abriss der mittelhochdeutschen Grammatik,
Max Niemeyer Verlag, Tübingen, 1966.
3. de Boor/Wisniewski: Mittelhochdeutsche Grammatik, Sammlung
Götschen Band 1108, Walter de Gruyter & Co., Berlin, 1967.
4. H. Mettke: Mittelhochdeutsche Grammatik, Veb Bibliographisches
Institut, Leipzig, 1970.
5. H. Paul/L. E. Schmitt: Mittelhochdeutsche Grammatik, 15. 16. 17.
Aufl., Max Niemeyer Verlag/Halle/Saale, 1950, 53, 57.
6. Paul/Moser/Schröbler: Mittelhochdeutsche Grammatik, 20. Aufl.,
Max Niemeyer Verlag, Tübingen, 1969.
7. O. Behaghel: Deutsche Syntax, 4 Bde. Carl Winters Universitäts-
buchhandlung, Heidelberg, 1932.

1. は Lautlehre, Formenlehre, Satzlehre の全般に亘ってめれなく取り上げられているので、Mhd. 勉強の最初に手にする文法書としては最適でしょう。ただし、最少限定の必要事項しか述べられていないので、深く進むには更に他の文法書を読む必要があります。2.、3.、4. は、ドイツで出版される Mhd. 文法書が一般にそうであるように、Lautlehre と Formenlehre しかなく、Satzlehre がありません。印欧語史の中で Mhd. の Lautlehre が扱えられているので、言語専攻生には特に興味惹かれる文法書でしょう。5. と 6. は世に有名な Hermann Paul : Mittelhochdeutsche Grammatik です。1881年初版で、その後版を重ねるにつれて F. Saran, E. Gierach, O. Behaghel, L. E. Schmitt, W. Mitzka といった一流の学者による erweitern od. bearbeiten がなされてきて、紹介した 6. に至っています。5. と 6. とは、従って、H. Paul の「中高ドイツ語文法」の増補改訂版とは言え、Negation の項目ひとつを比較してみても、いずれもそれぞれに示唆に富んでおり、その内容に異同も見られません。よって両方とも座右に備えておくべき文法書です。これらには、Satzlehre (od. Syntax) が詳述されているので、私にとっては Bibel です。7. は Mhd. の Syntax をゲルマン語史の流れの中において観察できるので、必読の書です。

辞 典

1. Matthias Lexer: Mittelhochdeutsches Taschenwörterbuch, S. Hirzel
Verlag, Stuttgart, 1963.
2. Matthias Lexer: Mittelhochdeutsches Handwörterbuch, 3 Bde.
Verlag von S. Hirzel, Leipzig, 1872.

3. G.F.Benecke/W.Müller/F. Zarncke: *Mittelhochdeutsches Wörterbuch*, 3Bde. Georg Olms Verlagsbuchhandlung, Hildesheim, 1963.

1.は廉価で収録語数も多く、訳語を探すだけなら便利ですが、引用例がないので、頼り切れなところがあります。そこへゆくと、同じ *Lexer* の2は引用例が豊富で、じっくり読めます。原文の不明の箇所がそっくり引用されていて喜ばしてくれるのもこの辞書です。1.と2.は何としても手許に置きたいものです。3.は引用例も見出し語も豊富ながら、検索しにくい欠点があります。主要語はABC順に配列されているが、派生語・合成語がその関係する主要語の箇所にまとめて記載されているからです。たとえば、*lantvoget*なる語をこの辞書でひく場合には、*lant* の辺りを調べてもだめです。*voget*の周辺で探さなくてははいけません。その上、肝心の見出し語が他の派生語・合成語にくらべて薄く印刷されているので、見立ちにくい。これをひきこなすには根気が必要です。2.の *Lexer* ではそれぞれの見出し語のうしろに、この3.との関連の数字が記してあるので、2.をひいて然るのちに3.をひけば求める単語に直ちに達せられます。たとえば、*erweinen swv.* (III. 558a)と2.にあれば、3.の第III巻の558ページの左欄をみよ、ということです。

Mhd. をやる場合、辞書引きは根気あるのみです。先に引用した *Nib.* の第1詩節2行目の *arebeit* をひくとしましょ。 *arebeit* とつづり通りにひいても出ておりませんが、*e*を除いて *arbeit* でひくのです。この語には *erebeit*, *erbeit* の *Nebenform* もありますが、すべて *arbeit* でひかななくてはだめです。これはわかりいい一例に過ぎません。最初はだいぶ苦勞します。特に動詞においては、粘り強く食いついているうちに、自ずと規則は体得されましょ。

読 本 (テキスト)

1. K. Bartsch/H.de Boor: *Das Nibelungenlied*, 19. Aufl., F.A. Brockhaus, Wiesbaden, 1967.
2. H.Brackert: *Das Nibelungenlied*, 1.2. Teil, Fischer Bücherlei GmbH, Frankfurt a.M., 1970.
3. K. Langosch: *Der Nibelunge Nôt*, Sammlung Göschen Band I, Walter de Gruyter &Co., Berlin, 1956.
4. Michael S. Batts: *Das Nibelungenlied*, Max Niemeyer Verlag, Tübingen, 1971.
5. W.Schröder: *Der Nibelunge Liet und Die Klage*, Böhlau Verlag, Köln/Wien, 1969.

以上は「ニーベルンゲンの歌」(*Nib.*)の基本的にして手頃なテキストです。1.は脚註が至れり

尽せりて、第1詩節から堪念に熟読していけば、読解力は急速に養成されるものと信じます。最もお勧めしたいテキストです。2は Nhd. との対訳です。速読用に便利です。Nib. の Nhd. 訳としては Reclam 文庫 642-45 に F. Genzmer 訳もあります。3は抜萃ですが、うしろに Wörterzeichnis が詳しく出ていますので、基本的語彙の修得にも好都合です。4は Nib. の写本間の異同が一目瞭然に解るように配列されています。専門家には欠かせないものです。語学上の註はありません。5は Nib. の写本 C の写真版です。Nib. のテキストは以上のほか実に多数出版されていますが、最近三修社が覆刻版として出した Kirschner の Deutsche National-Literatur の Mittelalter の部にもはっております。

Nib. はわが国でも翻訳されていますし(岩波文庫)、内容も面白いので、Mhd. の手始めのテキストとしては最適でしょう。Nib. で Mhd. の文法や表現方法や語彙を十二分にマスターして、いわばここに根城を構築してのち、Mhd. 文字の大海原に乗り出していきやり方が最良の策だと sich einbilden しております。従って、故意に Nib. のテキストのみ挙げましたが、訳読演習用としては次の2書の特記しておきましょう：

1. Zupitza/Tschirsch: Einführung in das Studium des Mittelhochdeutschen, 3. Aufl., Wilhelm Gronau Verlag, Jena, 1963.
2. A. Bachmann: Mittelhochdeutsches Lesebuch, 19 Aufl., Beer & Cie. Zürich, 1970.